

「こころ」の視点から

佐藤 誠

1. 「こころ」とは

心という漢字は、心臓の形をかたどった象形文字である（heart = 心臓 = こころ）。「こころ」が働いている間は、人間が人間らしさを保つという意味である（辞書）。

こころくばり、こころにかける、こころがこもる・・・。

こころ変わり、こころない仕打ち、ふたごころ・・・。

「こころ」は測定できない、感じとるものである。

いくらでも装うことのできる見かけを測量するのではなく、見えない「こころ」を分かろうとするには、自分の「こころ」を磨き、感受性を高める必要がある。

2. 「星とたんぽぽ」金子みすゞの詩

青いお空のそこふかく、海の小石のそのように、夜がくるまでしずんでる、
昼のお星はめにみえぬ。

見えぬけれどももあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

ちってすがれたたんぽぽの、かわらのすきに、だアまって、春のくるまで
かくれてる、つよいその根はめにみえぬ。

見えぬけれどももあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

3. コミュニティ・ピアノ論

ピアノには88個の鍵盤がある（白鍵52 + 黒鍵36）。

すべての鍵盤は違う高さの音を出す。

音の高さは価値の高低と関係ない（半音は半分の価値しかないわけではない）。

違う高さの音を出すからハーモニーが生まれ、曲が演奏される。

ピアノの演奏家がいなければ、曲を奏でられない。指揮者も必要である。

4. 調布の街で、素晴らしい曲を演奏し、また聴きたいものである。